



# 日本地球化学会ニュース

No. 245     June 2021

## Contents

年会のお知らせ .....	2
2021年度日本地球化学会第68回年会のお知らせ(1)	
2021年度日本地球化学会ショートコースのご案内	
学会からのお知らせ .....	4
2020年度「学会賞・奨励賞・功労賞」受賞者紹介	

## 年会のお知らせ

### 2021年度日本地球化学会第68回年会のお知らせ(1)

主催：日本地球化学会

共催：弘前大学理工学研究科

共催学会(予定)：日本化学会，日本分析化学会，日本温泉科学会，日本地質学会，日本質量分析学会，日本鉱物科学会，日本微生物生態学会，変更追加等，年会サイトを参照ください。

**本年年会について(重要)**：コロナ感染症の影響により，本年の年会はオンライン開催(必ず実施)と弘前大学会場での対面開催(感染症の状況が著しく深刻ではない場合に実施)を組み合わせるハイブリッド開催を予定しています。発表申し込み開始までに，対面開催を実施するかどうかの一定の判断をしますが，会期直前の状況を受けて対面開催予定セッションをオンラインへ移行する判断をする可能性があります。

年会サイト：<http://www.geochem-conf.jp/>

本年年会に関する重要な変更，参加者への周知事項など，すべて年会サイトに掲載しますので，参加者はサイトをよくチェックするようお願いいたします。

日程：9月1日(水)～15日(水) 討論実施期間

9月6日(月)～8日(水) Zoomセッション

9月7日(火) 夜間集会

9月9日(木) 総会・授賞式・受賞講演

9月9日(木)～10日(金) 弘前セッション

9月21日(火) 閉会式

全面オンライン開催となった場合

9月6日(月)～10日(金) Zoomセッション

会場：オンライン会場および弘前大学会場(弘前大学50周年記念会館)のハイブリッド開催

弘前大学会場への交通：JR奥羽線弘前駅から徒歩20分，または，弘前駅3番バス乗り場から「小栗山・狼森線」または「学園町線」乗車，約10分の「弘前大学前」下車

※アクセス方法の詳細については，下記のサイトを参照ください。

[https://www.hirosaki-u.ac.jp/wp\\_access.html](https://www.hirosaki-u.ac.jp/wp_access.html)

宿泊：大学周辺に宿泊施設はありません。弘前駅前または弘前城周辺地区のホテル・旅館を利用ください。大鰐温泉の旅館・民宿も推奨されます。

大鰐温泉から大学へは，弘南鉄道大鰐線(弘前学院大学前駅)が利用できます。

内容：研究発表は「基盤セッション」と「特別セッション」により実施します。

コロナ感染症拡大防止のため，通常形式のポスター発表・懇親会・企業展示を行いません。

総会・授賞式・受賞講演は，オンラインで実施しますが，弘前大学会場にお越しの方は会場で参加できます。受賞者の方は可能な限り弘前大学会場で授賞式・受賞講演会に参加ください。恒例のショートコースは7月17日(土)にオンラインで実施予定ですので，別項を参照してください。

研究発表の方法：すべての研究発表で，ウェブ上の討論を実施します。発表資料のウェブアップを参照してください。

基盤セッションの発表はオンラインにより実施します。特別セッションの発表は弘前大学会場での対面により実施します。

基盤セッションにおいては，「口頭発表に準ずる発表(以下，口頭発表と書く)」，「ポスター発表に準ずる発表(以下，ポスター発表と書く)」のいずれかを選択します。

ポスター発表では，発表資料をウェブにアップし，ウェブ上で質疑・討論を行います。

口頭発表では，ウェブ上の質疑・討論に加え，Zoomセッションの発表時間が指定され，指定された時間帯にZoomを通してリアルタイムの発表・質疑・討論を行います。万一，口頭発表の発表希望者が多いことによりプログラム編成が困難となった場合，ポスター発表への変更をお願いする可能性があることをご承知おきください。

特別セッションは，原則として弘前会場での口頭発表としますが，旅行が困難な状況の方の発表についてはZoomを通したリアルタイム発表とし，質疑・討論をオンラインにして実施することもあります。

セッション：

・基盤セッション

G01 大気とその境界面における地球化学

G02 環境地球化学・放射化学

- G03 海洋の地球化学
- G04 初期地球から現在までの生命圏の地球化学
- G05 古気候・古環境解析
- G06 宇宙化学：ダストから惑星，生命へ
- G07 素過程を対象とした地球化学
- G08 地球深部から表層にわたる元素移動と地球の化学進化
- G09 地球化学のための最先端計測法の開発，および，境界領域への挑戦
  - ・特別セッション
- S01 地球環境と生元素循環
- S02 北日本におけるグローバル地球科学総合研究
- S03 環境放射能研究の最前線
- S04 地球化学の温故知新

学生発表賞：きわめて優れた発表を行った日本地球化学会学生会員に授与します。閉会式において表彰式を行います。学生発表賞を希望する学生会員は，発表申し込み時にエントリーしなくてはなりません。基盤セッション（口頭・ポスター）・特別セッションのいずれの発表でもエントリーできます。学生発表賞に応募する方で学会入会手続きがまだの方は，速やかに入会手続き（書類提出＋入金）を行う必要があります。

発表申込受付期間：例年と同様，発表要旨提出を発表申込と同時にを行います。要旨原稿の提出を行わないと発表の申込が完了しません。年会サイトのみから受け付けます。発表申込及び要旨提出は，6月16日（水）14時受付開始，7月21日（水）17時〆切を予定します。〆切日時は延長しません。タイトル・抄録・投稿する要旨の原稿は〆切日まで修正可能ですが，〆切日以降一切修正できなくなります。要旨のフォーマット（Word）を年会サイトからダウンロードし，書式に従って要旨を作成してください。発表申し込みの際に，200～400字程度の和文・英文抄録を入力します。J-Stageに作成される発表毎のページ（日本語・英語）の抄録として掲載されるので，注意して作成してください。また，申し込み入力の最後のページで発表タイトルと要旨本文テキスト（J-Stageでの検索用）を入力します。発表申し込みに関して不明な点は，年会事務局にメールで問い合わせてください。〆切直前になると対応できない可能性があります。

すので，余裕を持った時期にお問い合わせください。

参加申込：参加のみの申し込みは，同じく年会サイトから，6月16日（水）より8月25日（水）17時まで受け付けます。

プログラム：プログラム（Zoomセッション，特別セッション）は，発表申込締め切り後，作成されます。8月上旬を目指して，年会サイト上に公開する予定です。

発表資料のウェブアップ：基盤セッション（口頭・ポスター），特別セッションのすべての発表において，ウェブ上にアップロードした資料による質疑・討論を，ウェブ上のコメントとその返答という形式で行います。pdf形式の発表資料（必須）を8月25日（水）までに，ウェブを通して提出しなくてはなりません。希望する方のみ動画（mp4）ファイルも合わせてアップできるようにします（予定）。参加登録した方のみパスワードを配布し，閲覧・質疑・討論が可能になるようにします。

参加登録費：

一般会員	学生会員	会員外一般	会員外学生
3,000円	1,500円	5,000円	3,000円

※「会員」は日本地球化学会及び共催学会の会員を指します。

支払方法：年会サイトからの申し込みには，クレジットカードによるオンライン決済が必要です。オンライン決済の場合，領収書を後日メールで送信します。クレジットカードによる支払いが困難な場合は，年会事務局に〆切の一週間前までにお問い合わせください。弘前大学会場では当日の参加登録（金額は事前登録者と同じ）を現金に限り受け付けます。

要旨集：要旨集の印刷はしません。年会サイトで公開します。

協賛企業：年会サイトに企業ロゴや関連情報へのリンクを掲載します。オンラインで会員への周知などが行えるように準備をいたします。協賛いただける企業様は早めに年会事務局にお問い合わせください。

夜間集会：オンラインにより9月7日（火）に実施する予定です。詳細は年会サイトに掲示します。

総会：9月9日(木) 午後、オンライン開催しますので、会員の皆様は各自の接続機器で参加願います。弘前大学会場にお越しの方は、会場で参加できます。

受賞講演会：9月9日(木) 午後、総会終了後にオンライン開催します。受賞者の方はぜひ弘前大学会場で講演ください。Zoomを通してオンライン配信します。

閉会式：9月21日(火)にオンライン開催します。学生発表賞の表彰式等を行います。詳細は年会サイトに掲示します。奮って参加ください。

重要事項：コロナ感染症の状況により、全面的オンライン開催に変更される可能性があります。全面オンライン開催は、特別セッションをオンラインにする、以外の変更をすることなく開催します。特別セッションを対面で開催するかどうかについて、6月16日(水)の申し込み開始までに一定の判断をいたします。国内の感染拡大状況によっては、会期直前に全面オンライン(弘前で開催予定の特別セッションをオンライン)に変更する判断をする可能性があります。その場合、交通や宿泊のキャンセルに係る経費を学会が負担することはできませんので、あらかじめご承知おきください。

2021年度日本地球化学会第68回年会事務局

E-mail: 2021LOC@geochem.jp (@を半角に変えて送信してください)

野尻幸宏(委員長), 折橋裕二(年会幹事)

赤田尚史, 田副博文, 野田香織, 堀内一穂(以上弘前大), 渡邊修一(海洋研究開発機構), 福山繭子(秋田大), 平野直人(東北大), 平田岳史(東大), 北川桐香(むつ市役所)

2021年度 日本地球化学会ショートコースのご案内

日程：2021年7月17日(土)

開催形式：オンライン(Zoomを使用)

詳細は、以下ホームページをご覧ください。

<https://gsjevent.s2y.jp/2021/>

今年度のショートコースは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年に引き続きZoomによるオンライン開催となります。

白岩学先生(カルフォルニア大), 尾崎和海先生(東邦大), 松岡萌先生(JAXA), 亀山宗彦先生(北大)の4名の講師の先生をお招きした、地球化学研究の魅力を再発見・議論する充実したプログラムを企画しております。また、新たな試みとして、運営委員主体の企画も実施予定で、現在準備を進めています。

会員の皆様には無料でご参加いただけます。

ぜひ、参加をご検討ください。

2021年 日本地球化学会 ショートコース運営委員会  
(E-mail: GSJ2021Event@gmail.com)

橋口未奈子(名大)・安藤卓人(島根大)・鹿児島渉悟(富山大)・窪田 薫(神戸大)・八田真理子(JAM-STEAC)・日比谷由紀(東大)・山田明憲(豊島電気)・服部祥平(東工大)

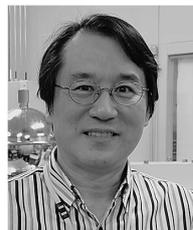
## 学会からのお知らせ

●2020年度「学会賞・奨励賞・柴田賞・功労賞」

受賞者紹介

学会賞：石川剛志会員(海洋研究開発機構高知コア研究所・研究所長)

受賞題目：「沈み込み帯を中心とした流体・物質循環に関する地球化学的研究」



石川剛志先生は、1986年に岡山大学教育学部を卒業され、1988年に同大学院・教育学研究科理科教専攻修士課程を修了、博士課程では同大学院・自然科学研究科物質科学専攻に進学し、1991年に博士号を取得されています。博士課程でのご専門はホウ素同位体の地球化学であり、博士論文の題名は「Development of boron isotopic analysis and its application to the geochemistry of oceanic crust and island arc volcanics」でした。その後、日本学術振興会 特別研究員を経て、1993年からほぼ1年間米国カーネギー研究所(Carnegie Institution of Washington)で研究員をされました。帰国後、1994年に静岡大学理学部に着任され、助手・講師・助教授の時代を過ごされ、2006年に海洋研究開発機構高知コア研究所 グループリーダーとして着任され、2015年4月より現在の立場で勤務しておられます。

私が石川先生に最初にお会いしたのは、1988年当時で、三朝の研究所で博士の研究を開始された頃でし

た。当時は、研究所の設備も未整備の段階だったので、冷気を廊下の向かいの部屋から導入するため、底を抜いた段ボール箱を継ぎ合わせた手製の配管を作られていたのを懐かしく思い出します。当時から穏やかで、まじめで、誠実なお姿は、あの時のままで、今も変わりがありません。この特徴は、石川先生が、高知コアセンターの同位体地球化学ラボの運営を当初から主導し、構築した分析環境と分析技術を惜しみなく地球科学コミュニティに開放・共用することに尽力してきたことにも繋がっています。結果として、同ラボを利用した若手研究者のうちこれまで7名が日本地球化学会奨励賞を受賞していることに象徴されるように、次世代を担う研究者の育成という多大な貢献へも結びついています。

石川先生は、流体プロセスの研究を行う中で、ホウ素同位体比が鋭敏な地球化学的トレーサーとなる可能性を見出し、酸分解と表面電離質量分析を組み合わせた岩石のホウ素同位体比の高精度分析法を世界に先駆けて開発しました。それを発展させ、海洋地殻や堆積物に関する基礎データを自ら積み上げるとともに、さらに沈み込み帯へと研究を展開し、ホウ素同位体比を組み入れた強力なマルチ同位体解析を駆使して、沈み込むスラブから放出された流体の島弧マグマへの寄与を明確に示すことに成功しました。そして、流体が、従来想定されていたスラブ中の堆積物のみならず、海洋地殻の部分からも大量に供給されていること、海山の沈み込みがスラブ流体のフラックスや島弧マグマの組成・生産量に影響を与えていることなどを次々と明らかにしました。

石川先生は、研究人生を通じて、広範囲の分野に適用可能な各種同位体比の先端的分析技術の開発も継続的に行ってきました。分析の高度化と併行し、斬新なアイデアを駆使し、陸上に衝上した世界最大の海洋プレート断片であるオマーンオフィオライトの拡大軸から沈み込み帯への転化メカニズムをマグマ組成に基づき明らかにしました。さらに、独自の発想で、地震断層の研究においても大きな足跡を残しました。これは、元素の分配係数を駆使した独創的なアプローチを用いて断層岩を解析することで、地震時の断層内に高温の流体が存在していたことを世界で初めて立証したことです。この業績は、類似現象の地球化学的解明にも大いに役立ち、新たな研究展開をもたらす、世界的にも非常に高く評価されています。

この度、石川剛志先生は、「沈み込み帯を中心とし

た流体・物質循環に関する地球化学的研究」という題名のもと、学会賞を受賞されました。研究の特徴は、「斬新なアイデアを駆使した流体岩石相互作用の飛躍的理解」ですが、その背後には「高度な分析法の開発」があります。さらに「お人柄がもたらす指導」による分野の拡大が挙げられます。先生のラボで研鑽をつんだ後進の方々もますます発展し、先生の研究分野は日々進展を見せております。受賞を機に、今後とも、先生および先生を囲む周りの方々の、さらなるご発展を祈念いたします。

(東京大学大気海洋研究所 川幡穂高)

奨励賞：西田 梢会員（筑波大学生命環境系）

受賞題目：「実験生物学と同位体地球化学により環境生態指標として生物起源炭酸塩を利用する研究」



西田梢さんは横浜国立大学を卒業後、東京大学大学院理学系研究科で学位を取得し、産総研と茨城高専のPDを経て、2020年より現職の筑波大学にて研究教育活動に邁進しています。西田さんの研究活動の出発点は地質・古生物学

で、特に貝類の微細構造の組成解析による高精度環境指標の開発が一連の受賞研究の起点でした。その後、新たな環境指標の開発や海洋酸性化実験での海洋環境の将来予測、さらには安定同位体分析技術の高度化にも取り組むなどの分野融合の柔軟なアプローチで数多くの研究成果を公表してきました。受賞講演でもお話しされていたとおりに、「研究対象への専門性」と「分析技術の応用深化」の融合を実践してきており、研究展開の将来性を期待させるものです。と、ここまで書きましたが、本稿は西田さんの奨励賞の推薦者である弘前大学の野尻幸宏先生からご指名をいただき、直近の西田さんをよく知る者ということで筆者（石村）が執筆させていただいております。研究内容については受賞論文もご参照いただくと、ここでは西田さんという「人」について触れていきたいと思っております。

さて、西田さんを一言で表現するとすれば、迷いの無い信念をもった自由人です。私のラボでのニックネームは「姉御（あねご）」でした。出合いを思い返すと私の産総研ポスドク時代に遡ります。西田さんの博士研究の中で、二枚貝の微細構造の違いが水温履歴の記録として活用できるのではないかという仮説をた

て、その検証をするため同位体分析をしたいと。当時西田さんは古生物学を基盤としていましたので、私は「ちょっと分析したいぐらいかな」ぐらいに思っていました。地球化学分野にここまで分け入るとは思っておらずで。そして数年後、学振PDの受入先として私のラボ（茨城高専）を選んでくれた際も西田さんの迷いの無さは揺るぎないものでした。当時立ち上げたばかりの私のラボは、大学や研究所に比べると研究環境としての制限要素があることは明らかでした。高専は15-20歳の学生教育がメインで、実際に私の普段の業務もほぼ「金八先生」。PD採択可能性の上でも、西田さんの研究者としてのキャリアパスを考える上でも、非常に判断が難しく、当初は「再検討するように」と伝えた（＝やんわり断った）ことを覚えています。しかし数日後、西田さんの謎の決意は揺るがず、「独自の分析機器、共同研究や研究試料の環境、若手学生との交流による教育研究能力向上の場として申請したい」という返答でした。今だからわかるのは「私を選んだ道だからなんとかかなるでしょ！」という西田流の選択だったのではないかと。さすがです。

その後の高専時代、西田さんは学振PDとして研究に勤しみつつ、学生の研究指導や授業も担当し、積極的に教育活動にも取り組んでくれました。日常から学生の進路や生活（恋愛？）の相談なども親身に行っており、ここで学生から「あねご」と呼ばれ始めます。おそらく学生の私に対するグチも西田さんが受け止めてくれていたのかと。それ以外にもラボの複数の共同研究にも主体的に参画し、研究遂行とマネジメント面でも多大な協力をいただきました。私自身にとっても大きな励みとなり、研究を進展させる上でも強い駆動力となってきたものです。

若干プライベートなことまで触れさせていただくと、西田さんは類い希なるオンオフの切替の達人でもあります。高専在籍中には金曜夜遅くまで仕事をしていたかと思えば、週末には愛車のランエボで駆け回りSNSにはサーキットやスキー場に立つ姿が。スイスのETHに長期滞在していた時にも週末の写真はアルプスのスキー場でした。研究に対しての駆動力は、このオンオフの切り換えがあつてこそなのかと。今後も研究でのご活躍と週末活動の充実が大いに期待されます。

（京都大学大学院 人間・環境学研究所 石村豊穂）

功労賞：紀本岳志会員（紀本電子工業株式会社 代表取締役社長）

受賞題目：「研究現場が必要とする観測機器の開発を通じた海洋と大気地球化学への貢献」



紀本岳志会員の功労賞受賞を祝して、寄稿いたします。紀本さんは、紀本電子工業株式会社の代表取締役社長を務められていますが、紀本電子工業は、御尊父の紀本俊夫氏が1953年に創業した分析化学機器専門メーカーです。大気汚染自動測定連続記録計（SO<sub>2</sub>・粉塵）の国産第一号機を1959年に他社に先駆けて開発しました。当時の厚生省や大都市圏の自治体に採用納入され、大気汚染物質の的確なモニタリングを通じて深刻さを増していた大気汚染の問題解決に貢献しました。紀本さんの環境自動化学分析への情熱意欲は、まさに先代の血を引き継いだものです。

紀本さんは、京都大学理学部化学科に進まれ、藤永太郎先生の分析化学研究室で、最新の機器分析法に関して造詣を深められ、ボルタンメトリー法やフローインジェクション法などの分析化学手法を、陸水化学や海洋化学に応用する研究を進められました。会社を担うべく紀本電子工業に入社され、紀本電子工業の守備範囲を、大気環境のみならず、水圏科学、海洋科学の分野へと広げてゆかれたのは、ご自身の志向が反映されたものと思います。

紀本さんは、その磊落な性格をもって、全国の地球化学研究者と親交を深められ、その要望を受けながら、ご自身の会社の技術力を生かして、新しい現場観測機器・機材の設計・製作への協力に尽力されました。功労賞の受賞理由には、海洋の二酸化炭素分圧計測システム、海水の全アルカリ度自動滴定装置、大気中エアロゾル質量濃度測定器、大気エアロゾル化学成分連続自動分析装置を挙げさせていただきましたが、ほかにも、海水中の微量鉄測定装置、海底熱水自動採取装置、栄養塩自動連続計測装置、海水pH測定用電極の開発など、枚挙にいとまがありません。

私は、海洋の二酸化炭素観測で、紀本さんに変えてお世話になりました。そこで、関連する話を紹介させていただこうと思います。国立環境研究所が継続実施している北太平洋の商用船を利用する二酸化炭素観測は、協力船の変更にとまなう機材ののせ替えて生じた

1年ほどの停止期間2回を除くと、1995年から26年間にわたり途切れることなく実施されています。2005年にはオセアニア航路を加え、2路線で太平洋広域の海洋二酸化炭素分圧観測を行っています。国立環境研究所の発信サイト (<http://www.soop.jp>) から最新の観測データを、追って国際統合ベースSOCAT (<https://www.socat.inf>) から国際協力による品質管理を経た観測データを公開し、世界の研究者が利用できるようになっていきます。

その観測開始においては、紀本さんの導きが大きく寄与しました。環境庁の発足を受け1974年に国立公害研究所が設立されましたが、1980年代になると、公害問題のみならず、オゾン層破壊、酸性雨、砂漠化、生物多様性の減少、海洋汚染、そして地球温暖化といった地球規模環境問題の重要性が増してきました。1988年にはIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が設置されました。このような変化を受けて国立公害研究所は、国立環境研究所に名称変更するとともに、所内に地球環境研究センターを設立して、地球環境モニタリング事業を開始することになりました。筆者には三つのキーワード、すなわち、「地球規模モニタリング」、「海洋」、「二酸化炭素（できることなら）」が与えられ、モニタリング事業の開始を検討せよ、ということになりました。事業として実施するために「そこそこ」の資金は準備できるものの、モニタリングというからには、長期継続できるプラットフォームが必要になります。観測船を持たない国立環境研究所でできることとして、繰り返し観測船備船をすると「そこそこ」を越す資金が必要となるし、備船ができるとしても年に1回や2回の観測航海で一体地球規模のモニタリングになるのか、と悩んでいたところでした。

紀本さんは、その広い人脈をもとに話を聞きつけ、カナダ海洋科学研究所（Institute of Ocean Science, IOS）で気候化学研究室を主宰されていたC.S.Wongs先生と話をされ、国立環境研究所の海洋二酸化炭素モニタリング観測の可能性について、私の知らないところで先生にお話をしてくれていたのです。私は1994年の春にWong先生から突然のファックスをもらい、驚いたという次第でした。Wong先生は高名な海洋化学者で、私は少しだけの面識だったのですが、そこは交友関係の広い紀本さんが、先回りして話を進めてくれていました。Wong先生によれば、IOSの大気観測事業にかつて協力してくれた日本-カナダ間を定期運

航する貨物船があるので、ぜひ、二酸化炭素観測の協力を求めたらどうか？という内容でした。また、Wong先生には、ご自身の研究室単独で貨物船を使う太平洋の二酸化炭素分圧観測を試みたものの、長期の継続は支援要員を出し続けることができずに断念したという過去がありました。そのため、貨物船の運航を両側でサポートをしながら長期継続するという夢をお持ちだということでした。貨物船は、カナダの材木を日本に運び、日本や韓国の自動車を北米に運ぶノルウェー籍のM/S Skaugranという船で、日本入港時に船を見に行きました。ノルウェー人船長、機関長は大変協力的で、話はどんどん進行し、1995年3月の観測開始に間に合わせるように、装備の準備と工事を行って観測開始にこぎつけました。この間、紀本さんと実弟の紀本英志氏（現：紀本電子工業取締役室長）には、たびたび、船を訪れていただいたり、工事に付き合っていたり、本当にお世話になりました。また、IOS側のカナダ入港時の手厚い支援もあり、私が乗船した1回目の観測航海からデータ取得に成功し、2回目以降の維持も紀本電子工業の強力なサポートで進めることができました。

そして紀本さんから、皆で立ち上げた観測航海にぜひ一度乗船したいという申し出があり、1995年9月に博多からバンクーバーに向かうSkaugaran観測航海第5回目に乗船していただきました。9月ということもあって、船は日本の沖で強い台風に遭遇し、貴重な経験ができたこと紀本さんは大喜びでした。5万トン級の貨物船は、通常の観測船なら逃げるしかない状況下でも、速度は落としても逃げずにそのまま進路を保つことが多いです。そのため、観測船ではとても体験できない大しげに遭遇できるチャンスがあります。このように、紀本さんは観測の現場に参加されることに熱心で、それがまた、計測装置の開発に貢献しています。貨物船観測で利用している海水と空気間で二酸化炭素を平衡にしてガス分析装置に持って行く重要なパーツであるタンデム平衡器は、水産工学研究所（茨城県神栖市）の海水槽をお借りして国内外から何種類もの装置を集めて比較する相互比較実験の中で、紀本さんと話をしていた思い出のものです。これは、メンテナンスなしに長い期間維持ができる優秀な二酸化炭素用の平衡器です。貨物船観測は、装置の改良を進めて日本からの維持要員が乗船しなくとも船員に操作を依頼することで継続ができるようになったのですが、この平衡器のメンテナンスフリーの性能が大きく

貢献しています。

日本分析化学会機関誌「ぶんせき」には、大気エアロゾル化学成分連続自動分析装置、水中化学計測ロボット、微量鉄分析装置など紀本さんの夢を実現したいくつもの装置の逸話が掲載、公開されています。ぜひ一読いただければと思います ([http://www.jsac.](http://www.jsac.or.jp/bunseki/pdf/bunseki2010/201003konnichiwa.pdf)

[or.jp/bunseki/pdf/bunseki2010/201003konnichiwa.pdf](http://www.jsac.or.jp/bunseki/pdf/bunseki2010/201003konnichiwa.pdf))。今後も、紀本岳志さんと紀本電子工業株式会社には、大気と海洋の連続自動分析装置の開発を通じて、日本の地球化学へのさらなる貢献を、ぜひお願いしたいと思っております。

(弘前大学理工学研究科 野尻幸宏)

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会、書評、研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2021年9月頃を予定しています。ニュース原稿は8月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会）

太田充恒  
〒305-8567 つくば市東1-1-1  
産業技術総合研究所地質情報研究部門  
Tel: 029-861-3848; Fax: 029-861-3566  
E-mail: [news-hp@geochem.jp](mailto:news-hp@geochem.jp)

角野浩史  
〒153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻  
Tel: 03-5454-6741; Fax: 03-5454-6741  
E-mail: [news-hp@geochem.jp](mailto:news-hp@geochem.jp)